労働運動はいつも社会問題の友達

橋下市長が市役所の労働組合に事務所の退去を命じたり、不法な思想調査をやったりして物議を醸しているが、弾を込めている時なのか、あんまり労働運動からの反論は聞こえてこない。そんな時、北海道で障がい者の事業所を営んでいる友人の石澤利巳さんが「社会的春闘」と提唱していて、へぇと思ってたら、大恩ある大谷強先生がこれにコメントされておられ、お元気なんだなぁと懐かしかった（http://npolife.net/　アドボケイト 2012 年 3 月号）。「労働運動が活発だとどんな課題を取り上げても上手く運ぶものだ。労働運動が低調だとどんな優れた課題を取り上げても不十分に終わる」、ボクは大谷先生のこのコメントに唸った。労働運動に「左バネ」を期待されているわけでも、「数の力」を頼んでおられるわけでもない。そこに「現場」を見ておられるのだと思うが、深い含蓄がある。

仮に 12 人の障がい者が 1 日 2 時間の 4 交代で働いている就労継続支援 A 型の事業所なら、12 人分の月額 140 万円の訓練等給付金と事業収益が事業者の懐に入るが、障がい者には 2 時間 × 最賃で月額 3 万円弱、12 人分なら 36 万円しか支払われないカラクリが現にあり、一種の「貧困ビジネス」だと石澤さんは弾劾する。厚労省が調査した福祉法人の内部留保は 1 施設平均 3 億 782 万円で、全施設合計で 2 兆円規模の内部留保となるのも合点がいかないと指摘し、「フクシ産業」は「貧困ビジネス」にも変質するもので、利用者や職員が「現場」で検証する「社会的春闘」ともいうべき運動の復活を望むと書いている。

生協や福祉法人が日本型社会的企業の原型だとボクが思うのは、ミッションの社会性がストレートなのと、公共に情報が公開されているからだが、それはあくまで縦軸にすぎない。横軸にあたる付加価値は「共に働く」、内部留保に抗する斜軸にあたる投資は「地域を営む」だとボクは思う。大谷先生は、大手の労働組合が福祉法人を参考にしたら「福祉を興せる」と提言されているが、賃金が抑制されている要因を社会に探せという指摘だ。ボクは、ビルメンテナンス産業の「個有」の価値は「環境産業」、付加価値は「雇用産業」で、現場から「労務単価の積算基準」を問い直そうと「政策入札研究フォーラム」の全国行脚を始めたが、大谷先生にご教授頂くことを怠っていたと反省した。

そうした価値化は「現場」から生まれいずるもので、労働運動とは、その現場の交流のことだと思う。ボクは、労働運動に「社会的労働組合」たれと難題を課す気はないが、「場」を慈しんで欲しいと願う。労使関係が辛い時にも、いつも現場たれと思う。現場が冷えると、社会問題は語り合う友を失うからで、大谷先生の指摘の通りだ。大阪市役所の労組は末端組織に至るまで事務所移転に追われていると聞いたが、花輪の一つも届けなければと思った。

㈱ナイス代表取締役 冨田一幸

hidarimakiの
この逸編
少年

監督：大島　渚
脚本：田村　孟
音楽：林　光
キャスト：渡辺文雄
小山明子
阿部哲夫
製作：1969年創造社＋ATG
カラー（一部モノクロ）スタンダード
DVD発売：紀伊国屋書

「あたり屋」という新種の詐欺が出没し始めたのはいつの頃だったか。未見だが 62 年に公開された『当りや大将』（中原康監督）という映画があるので、60 年初頭には既に現われていたのだろう。僕も、西成での伝聞を聞かされたことがある。あたり屋とは、走行する自動車などに自分の身体を接触させ、事故を装って金品を要求する連中のことだ。当時は警察に通報されるのを嫌い、示談で済ますことも多く何でも金にする男たちのアイデアは『危いことなら銭になる』(62 年 / 中平康監督）だった。その稼業を子どもにさせた両親が逮捕されたことで、いやが上にも社会にあたり屋の存在を知らしめることになった。この事件をヒントに田島孟が脚本を書き、大島渚が演出した『少年』が作られる。当時、大手映画会社が企画に乗らず、ＡＴＧ系[*1] の劇場で上映された。傷痍軍人[*2] で実の父親、継母、少年、幼い弟がおもな登場人物だ。日本海沿岸部の各都市を縦断しながら、様々な場所であたり屋を実践するのだが、母親から少年がその役割を担うようになる。親の指示通り従順にミッションを果たす少年は、アンドロメダ星雲から正義の宇宙人がやってくると信じている。時には自分が置かれた現実から、天橋立まで逃避する少年は、たくさんの日章旗が不気味に林立する海辺の町の片隅で涙を流し悲嘆する。つげ義春的世界をほうふつとさせるシーンだが、そこまでのカラーからモノクロームへの変調が少年の心情を語ってとても哀切である。このほかシーンによって色調に変化を見せる心理描写や映像があり、いかにも 60 年代の味わいがある。

父親の不条理に対し、この家業をやめようとする母親との諍いが恒常的になっていく。北海道のある町で、自分たちの所業の犠牲となり、赤い長靴を残して死んでいった少女がいた。突然の他人の死に少年は自殺を決意する。しかし降り積もる雪の中を追いかけてくる幼い弟に、アンドロメダ宇宙人を模した雪だるまを作り、宇宙人が自分たちを助けに来ると話し互いの境遇を慰めあう。だがそんな非現実をも否定した少年は雪だるまを壊してしまい、真っ白い雪原の中に少女の赤い長靴と、少年の怒りだけが取り残される。彼らは捜査の手を逃れ西成区内に住居を移すものの遂に逮捕のときが来た。

日本映画の新潮流であった大島渚には、『太陽の墓場』(60 年）『絞首刑』(68 年）など超ど級の魅力的作品が数多くあるが、『少年』は全編がリリカルで、とくに養護学校から引抜いたという少年役阿部哲夫の存在が脅威だ。彼の無表情はとんでもなく危険で悲しく、不気味でそして感動的だ。『少年』は阿部の存在が全てといっていい作品で、今も稀有な逸編だと思う。

ｈｉｄａｒｉｍａｋｉ

＊1：アート・シアター・ギルドの意。低予算で非営利的映像作品の製作や配給をし、日本映画史上に優れた功績を残す。大阪は北野シネマ地階で上映された
＊2：第二次大戦で怪我をした軍人